



Title	エスキシェヒル・カラチャイ語における動詞の名詞化
Author(s)	藤家, 洋昭; Akbay, Okan Haluk
Citation	外国語教育のフロンティア. 2021, 4, p. 79-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エスキシェヒル・カラチャイ語における動詞の名詞化

Nominalization of Verbs in Eskisehir-Karachay

藤家 洋昭・AKBAY, Okan Haluk

要約

言語においてある品詞が別の品詞に変わるという現象は珍しくない。いわゆる名詞化という現象も、少なくない言語で見られる。しかし、名詞化のメカニズムは言語によって異なると考えられる。このような中で、本研究ではエスキシェヒル・カラチャイ語における動詞の名詞化をとりあげた。エスキシェヒル・カラチャイ語は、トルコ共和国エスキシェヒル県で話されているチュルク系の言語であり、いわゆるトルコ語と系統を同じく言語であるが、系統的にはいわゆるトルコ語よりは、同じくチュルク系の言語であるカザフ語に近い特徴を持っている。エスキシェヒル・カラチャイ語についてのこれまでの研究は、動詞の名詞化はもとより、ほとんど何もされていないのが現状である。したがって本研究は、エスキシェヒル・カラチャイ語の動詞の名詞化についてのフロンティア的研究と言っても差しつかえないかもしれない。さらに、本研究では伝統的な言語研究手法にとらわれず、比較的最近の言語学で得られた知見、具体的には語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) と特質構造 (Qualia Structure) を記述・分析デバイスとして用いた。

本研究の結果、エスキシェヒル・カラチャイ語においては、

- ・動詞語幹がそのまま名詞として機能することはない。
- ・自立性の低い何らかの接辞を付けることによって名詞として機能する。
- ・その場合、接辞は接尾辞であり、動詞語幹に後続する。
- ・(日本語とは違い) 派生された名詞は、モノ名詞としての意味も持ち得る。
- ・これらのことは語彙概念構造から特質構造への情報の受け継ぎということで記述できる。具体的には、派生された名詞がモノ名詞としての意味を持ち得ることは、動詞が持っている語彙概念構造における項すなわち意味論的値が派生された名詞の特質構造に受け継がれるというように分析できる。

といったことが明らかになった。

キーワード：語形成、名詞化、チュルク諸語、エスキシェヒル・カラチャイ語

QISĞA SÖZ

Bir söz türden qalğan söz türge türetgen ya da qaytarğan, söz üçün fiilden isimge türetgen ya da qaytarğan; Japon til, İngiliz til degençe tilde alay seyir zat tüyültü. Allay tillege kerekli köp urunuw etilgenligine Eskişahar Qaraçayçası degençe urunuw etilmegen tilde bir söz türden qalğan söz türge türetgen ya da qaytarğan qalay bolat alqın cuq urunuw etilmeyin turat. Anı üçün bu urunuwda, Eskişahar Qaraçayçasında fiilden isimge türetgen ya da qaytarğan mekanizmanı qalay bolğanın belgilerge dep küreştik. Sözcüksel Ulamsal Yapı bıla Ençi Yapını mekanizmanı belgiler üçün tahlil lağını üçün qullandıq. Urunuwnu esebinde Eskişaharnı Qaraçayçasında fiilni Sözcüksel Ulamsal Yapısındağı qalay bilimle türegen isimde bolğan bilimge ozğanı belgilendi.

1. はじめに

エスキシエヒル・カラチャイ語は、トルコ共和国エスキシエヒル県で話されているチュルク系（トルコ系）の言語である。チュルク系の言語の中では（トルコ共和国の）トルコ語よりは、「山」が "taw"、「(数詞の) 4」が "tört" であること等、むしろ同じチュルク系の言語であるカザフ語などに近い言語特徴をもっている（カザフ語では、「山」「4」はエスキシエヒル・カラチャイ語と同じく "taw" "tört" であるが、トルコ語ではそれぞれ "dağ" "dört" である）。これまで、エスキシエヒル・カラチャイ語についてなされた記述は全くないわけではない[1]が、ごくわずかである。そのため、音韻・形態・統語のすべてにわたって明らかにされていないことが多い。そのような状況の中、本研究ではエスキシエヒル・カラチャイ語における動詞から名詞への派生をとりあげ記述する。具体的には、母語話者から生のデータを採集し、採集したデータを比較的最近の言語理論を用いて分析する。

なお、本論文は Akbay と藤家による共著論文である。この論文における分担を記しておく、Akbay は主にデータの発掘と提供を、藤家は主に全体の構成と提供されたデータの分析を担当した。

2. 問題のありか

ある品詞を名詞に変えることを名詞化と呼ぶことにすると、名詞化が持つ問題として、どのような方法で名詞化がなされるかということと、元の品詞が持っている情報がどのように名詞に受け継がれるかということがある。このことと関連して、派生された名詞がどのような名詞であるかということも興味深い問題である。名詞は、その意味の観点からデキゴト名詞とモノ名詞の二つのグループに分けられることが知られている[2]。動詞から派生した名詞がどちらになるかは言語によって異なり、たとえば日本語では英語に比べるとモノ名詞が極端に少なく、多くはデキゴト名詞である[2]。エスキシエヒル・カラチャイ語がこれらの点に関してどのようなになっているかについては全くといっていいほど明

らかにされていない。

2.1 名詞化の方法

名詞化には、形態的な変化なしにそのままの形で他の品詞になる場合と、接辞がつくなどして形態が変化する場合がある。前者の例として、たとえば英語では *talk* 等がある。また後者の例として英語における *construction* 等をあげることができる。

2.2 デキゴト名詞とモノ名詞

名詞化によって形成された名詞にかぎらず、名詞はその意味によって二つのグループに分けられることが知られていることは前述のとおりであるが、この点についてもう少し触れておく。デキゴト名詞とは、出来事ないし行為を、モノ名詞とは、行為の結果として生じる具体物を表す [2]。また、具体物だけではなく、「知識」のような抽象的な個物も表す [2]。

3. 基本データと考察

3.1 基本データ

エスキシエヒル・カラチャイ語の動詞からされた名詞に関する基本的なデータをみる。

動詞の形態的变化、いわゆる活用を持つ言語は少なくない。エスキシエヒル・カラチャイ語も動詞の形態的变化を持つ言語のひとつである。具体的にはいわゆる膠着語タイプの形態的变化である。すなわち、形態素を明確に抽出することができる。文法的な形式は接辞であるが、ほとんどすべてが接尾辞である。このようなことから、動詞語幹というものも明確に抽出できる。まず、動詞語幹がそのまま名詞として働くかということについて見てみる。

#aşa #kiy

ここで#をつけたのは、形式そのものは存在し容認されるが、それは動詞の命令形としてであり、名詞としては認められないという意味である。このように、動詞語幹は名詞として認められない。それでは、動詞からどのように名詞化されるかということであるが、本研究で得られたデータにもとづくと動詞語幹に何らかの接尾辞がつくことによってなされる。つまり、エスキシエヒル・カラチャイ語の名詞化は派生によるものであると言うことができる。

3.1.2 名詞化派生接辞

先にも述べたように、エスキシエヒル・カラチャイ語の動詞の名詞化は動詞語幹に接尾辞を付けることによる派生によってなされる。そこで、まずどのような接尾辞があるか

データを示す。なお、エスキシエヒル・カラチャイ語には母音調和があり、例えば、iであれば出現環境により i ~ ɪ ~ u ~ ü のように交替するが、本稿ではそれらの母音交替を i で代表させて表記する。同じように、e ~ a の交替は e と記すことにする。また、交替という点では k と q もそれらの前に来る母音によって交替するが、接尾辞を示す際には k と記すことにする。

-m

kiyim (服) (← kiy- (着る)), cawum (雨、降水) (← caw- (降る)), çıdam (我慢) (← çıda (我慢する、耐える)), süyüm (愛嬌) (← süy- (愛する、好む)), qaram (見た目、外見) (← qara- (見る)), aşam (食欲) (← aşı- (食べる))

-rik(q)

aşarıq (食べ物) (← aşı- (食べる)), içirik (飲み物) (← iç- (飲む)), qabarıq (食べ物) (← qab- (食べる)), cıyırıq (しわ) (← cıyırıl- (しわになる))

ここでは、「動詞語幹 + rik」という形に分析したが、「動詞語幹 + r + 母音 + k」という分析も否定できない。そうであれば、次に示す -k との関連性が指摘できる。

-k (-q)

canşaq (お喋り) (← canşa- (喋る)), esirik (酔っ払い) (← esir- (酔っばらう)), tükürtük (唾) (← tükür- (唾を吐く)), qısdırıq (クリップ、はさむもの) (← qısdır- (はさむ)), carıq (光、明かり) (← carı- (明るくなる))

-ç

quwanç (喜び) (← quwan- (喜ぶ)), süyünç (喜び) (← süy- (愛する、好む))

-ş

sağış (思い、考え) (← sagın- (思う、考える)), aşığış (急ぎ) (← aşık- (急ぐ)), tigiş (裁縫、針仕事) (← tik- (縫う)), qarğış (呪文) (← qarga- (呪文を唱える))

-hıç

açhıç (鍵) (← aç- (開ける)), cabhıç (ふた) (← cab- (閉める))

3.2 考察

上で見た派生名詞がどのような意味を持っているかを考察する。

3.2.1 モノ名詞かデキゴト名詞か

モノ名詞とデキゴト名詞のどちらであるかを客観的に区別するテストは複数ある。ひとつは構文によるもの、もうひとつは修飾語との共起関係を見るものである。構文によるテストを日本語に関して見れば、モノ名詞は「～に～がある」という構文をとる。一方、デキゴト名詞は「～で～がある」という構文をとる。わずかな違いではあるがこの違いは、違いがあるという意味において重要である。また、修飾語との共起関係は、モノ名詞には

時間を表す修飾語との相性がよくないという性質がある。例えば、日本語の「会議」はデキゴト名詞、「会議室」はモノ名詞である[2]が、「3時間にわたる」という時間を表す修飾語句との共起関係は異なる。「3時間にわたる会議」は問題なく容認されるのに対し、「*3時間にわたる会議室」は容認されない[2]。

エスキシェヒル・カラチャイ語についてもモノ名詞とデキゴト名詞を客観的に区別するテストを示す必要があることは当然である。しかしながら、前述した日本語における構文の違いによるテストをそのまま平行移動したものは使えない。すなわち、日本語においては「～に」と「～で」という明確な違いがみられるのに対し、エスキシェヒル・カラチャイ語においてはそのような違いが見られない。両方とも位格を示す形式である“-de”で表す。そこで本研究では、エスキシェヒル・カラチャイ語におけるテストの枠組みとして、「時間を表す修飾語句... bar/bol-」という構文を導入し、その構文で使えるかどうか容認性を見る。この構文において時間を表す修飾語と特別な解釈なく共起でき、さらに bol- と共起できればそれはデキゴト名詞である。bar と共起できればそれはモノ名詞である。まず、名詞化によるものではない名詞で確認しておく。

(1) a. Alayda lokanta bart.

あそこに・レストラン・bart 「あそこにレストランがある。」(モノ名詞)

(1) b. *Alayda lokanta bolat.

あそこに・レストラン・bolat

(2) a. Alaydagı trafik lampada her kün kaza bolat.

あそのの・交通・信号で・毎・日・事故・bolat 「あの交差点では毎日事故がある。」(デキゴト名詞)

(2) b. *Alaydagı trafik lampada her kün kaza bart.

あそのの・交通・信号で・毎・日・事故・bart

このように、以上のテストによりエスキシェヒル・カラチャイ語におけるモノ名詞とデキゴト名詞を区別することができる。

以上示したテストを用いて、エスキシェヒル・カラチャイ語における動詞由来の名詞の意味的特徴を考察する。

テストの結果、エスキシェヒル・カラチャイ語の動詞から派生された名詞にはモノ名詞があることが明らかになった。動詞の名詞化という観点で日本語を見るとエスキシェヒル・カラチャイ語とは違う点が見いだされる。

(3) a. マグロの刺身は最高だ。

(3) b. 刺身は、マグロが最高だ。

(4) a. アジの開きは最高だ。

(4) b. ?開きは、アジが最高だ。

(5) a. *サンマの焼きは最高だ。

(5) b *焼きは、サンマが最高だ。

上にあげたデータについて、まず(3)はa. b. ともに容認される。(3)においては、「刺身」という語が動詞の名詞化によるものそのものではなく、「身」をともなう複合語であることに注意されたい。つまり、「刺身」は、本研究で扱っている動詞からの名詞化とは異なるものである。

(6)については、「開き」という語の自立性について母語話者による違いがあるようであるが、落ち着きがよくないことは否定できない。

(7)について述べれば、b. はもとより、そもそも a. の例文も容認できない。日本語においては、「焼き」などという形式は、少なくとも「魚などを焼いたもの」という意味でのモノ名詞との存在を認めることはきわめて難しい。なお、「塩焼き」等にとすると容認性が上がる。また、「焼き物」にすることによっても容認性が上がる。

4. 分析

以上考察したデータを分析する。

4.1 分析の枠組み

本研究の分析の枠組みは語彙概念構造と特質構造にもとづいている。具体的には、動詞の意味記述を語彙概念構造にもとづいて、そして名詞の意味記述を特質構造にもとづいて行う。語彙概念構造と特質構造とはどのようなものなのか、以下に記す。

4.1.1 語彙概念構造

語彙概念構造((Lexical Conceptual Structure: LCS)以下、LCSと記す)は、Jackendoff [3] 等によって提唱されている意味に関する理論である。LCSには、研究者よる、あるいは、同じ研究者によるものでもバージョンによる違いがあるが、本研究では先行研究[2]にもとづき、以下の基本述語を仮定している。

CAUSE：外的な誘因が対象物の変化を引き起こすことを表す。

ACT：継続的あるいは一時的な「活動」を表す。主語の意思によって活動のはじめと終わりを決めることができる。

ON：ACTと一緒に用いられると働きかけの対象を示す。

BECOME：「変化」を表す。

BE：静止した「状態」を表す。

AT：BEと一緒に用いられて、抽象的状态、物理的位置を示す。

これら基本的述語の組み合わせにより、具体的な語は次のようになる。

活動自動詞：[1]ACT]

働きかけ他動詞：[[1]ACT ON-[2]]

変化自動詞：[BECOME [2]BE AT-[3]]

使役他動詞：[[1]ACT (ON-[2])] CAUSE [BECOME [2]BE AT-[3]]]

4.1.2 特質構造

本研究では、名詞の意味記述に特質構造 (Qualia structure) という考え方をを用いる。特質構造は、Pustejovsky[4]によって提唱されているものであるが、本研究においては用語の訳語等先行研究[2]にもとづく。それによると、特質構造は次のような要素から成り立っている。

構成役割 (Constitutive role)：その物を構成する部分・部品、中身、材料、～の一部分などの内的な性質。

形式役割 (Formal role)：具象物か抽象物か、自然物か人工物か、液体か個体か気体か、性別、形状などの外的な属性。

目的役割 (Telic role)：対象物が本来的に意図された目的や機能。

主体役割 (Agentive role)：それを産み出す動作や原因、成り立ち、出处。

以下、この枠組みにしたがってエスキシエヒル・カラチャイ語における動詞から派生された名詞の意味を記述する。

4.1.3 情報の受け継ぎ

LCSと特質構造の概要は以上のとおりである。本研究のテーマはエスキシエヒル・カラチャイ語において動詞から名詞に派生される際に動詞が持っている情報がどのように派生された名詞に受け継がれ、派生された名詞がどのような意味の名詞であるかを明らかにすることであることをあらためて述べておく。そうすると、分析プロセスは、動詞が持っている LCSのどの部分が派生された名詞の特質構造にどのように受け継がれるか、ということになる。

4.2 接辞と派生された名詞の意味

3章で見たデータを分析する。

-m

kiyim (服) (← kiy- (着る))

このデータを例にとれば、まず、kiy- という動詞は次のような LCSを持つと考えることができる。

[[1]ACT ON-[2]] CAUSE [BECOME [2]BE AT-[1]]]

この LCS が意味するところは、① が ② に働きかけたことにより ② が ① に位置することになったということである。ここでは、① は主語の意味論的値、② は位置が変化する何らかのものの意味論的値ということになる。そうすると、kiy- から派生された名詞は次のような特質構造を持つと考えられる。

構成役割：布、毛皮等

形式役割：Thing ② ②=人工物、個体

目的役割：防寒、ファッション

主体役割：[[①ACT ON-②] CAUSE [BECOME [②BE AT-①]]]

つまり、先行研究[2]が示すように、動詞からモノ名詞への派生は元の動詞の LCS が主体役割に受け継がれ、LCS が持ついわゆる項、より正確には意味論的値、のいずれかが派生された名詞の形式役割に受け継がれるということである。このことは、他の接辞についても同じように言うことができる。なお、このタイプの名詞化は日本語では全くないわけではないにしろまれで、エスキシエヒル・カラチャイ語の名詞化の特徴のひとつとしてあげることができるかもしれない。

一方、このような分析ができず、他の分析が求められる例もある。具体的には、次のような接辞によって派生されるものである。

canşaq (お喋り) (← canşa- (喋る))

このような例は、先行研究[2]にもとづけば元の動詞が持つ LCS における事象あるいは状態、本研究で採用している LCS の表記ではかっこの中の情報が派生された名詞の特質構造に受け継がれると考えることができる。canşaq (お喋り) を例にとると次のように分析できる。

“canşa-” という動詞の LCS

[①ACT]

派生された名詞の特質構造

形式役割：event

主体役割：[①ACT]

これだけでは情報が不足し記述が不十分である。LCS における各事象にタグあるいはラベルのような情報を補う必要がある。もっとも、これは新しい試みではなくそれらの情報が省略されていただけである。そうすると、先の動詞の LCS は次のように修正される。

[^{event α} ①ACT]

この修正したがつて記述しなおすと次のようになる。

派生された名詞の特質構造

形式役割：event α

主体役割：[^{event α} I]ACT]

つまり、 α という値を共有する。

以上見たように、エスキシェヒル・カラチャイ語における動詞からの名詞派生は、LCSが持つ意味論的値の受け継ぎと、LCSが持つ事象の受け継ぎの二つのタイプがあることが明らかになった。

5. 結論

以上、エスキシェヒル・カラチャイ語の動詞から名詞への派生を見た。

本研究で明らかになったことは以下のとおりである。

エルキシェヒル・カラチャイ語においては、

- ・動詞語幹がそのまま名詞として機能することはない。
- ・自立性の低い何らかの接辞を付けることによって名詞として機能する。
- ・その場合、接辞は接尾辞であり、動詞語幹に後続する。
- ・（日本語とは違い）派生された名詞は、モノ名詞としての意味も持ち得る。
- ・これらのことは語彙概念構造から特質構造への情報の受け継ぎということで記述できる。具体的には、派生された名詞がモノ名詞としての意味を持ち得ることは、動詞が持っている語彙概念構造における項すなわち意味論的値が派生された名詞の特質構造に受け継がれるというように分析できる。

参考文献

[1] 藤家洋昭, Okan Haluk AKBAY, 菅沼健太郎

2018 「チュルク諸語の類型論を視野に入れたエスキシェヒル・カラチャイ語の名詞述語文の構造の記述」『言語処理学会第24回年次大会発表論文集』761 - 764.

[2] 影山太郎

1999 『形態論と意味』くろしお出版.

[3] Jackendoff, R.

1990 *Semantic structures*. MIT Press.

[4] Pustejovsky, J.

1995 *The Generative Lexicon*, MIT Press.